

# カトリック復興期のヒューマニスト フランチェスコ・セルドナーティ補遺

(Aggiunta alla mia monografia, Francesco Serdonati,  
umanista del periodo di Restaurazione cattolica)

根占 献一

「カトリック復興期のヒューマニスト フランチェスコ・セルドナーティ」  
(Francesco Serdonati, umanista del periodo di Restaurazione cattolica)<sup>1</sup> を執筆した際、  
一次文献であるセルドナーティ自身の作品二点をどうしても見る事ができなかった<sup>2</sup>。  
幸い、半年間ではあったものの、在外研究のおかげで、余裕を持ってイタリア共和国と  
ヴァチカン市国、両国の各図書館を訪ねて目を通すことが可能になった。両国の図書  
館では主として五館を利用したが、以下の1は市国の、2は共和国（フィレンツェ）の図  
書館で読むことができた。それらの正式題名等は以下の通りである。

1. Nozze Rocca Saporiti-Resta *Vite di cinque donne illustri italiane* Cia Ubaldini-Caterina  
Sforza-Omandella Gaetani-Caterina Cybo-Caterina de' Medici. Scritte nel secolo XVI da  
Francesco Serdonati fiorentino, Firenze, Tipografia di G.B.Campolmi, 1869.

2 Per Nozze Modigliani-Modena *Lettere inedite* di Francesco Serdonati tratte dal Regio  
Archivio di Stato in Firenze, Padova, Tipografia Luigi Penada, 1872

この二点は表題から明らかなように、ともに婚姻を祝う形式、祝婚作品 (nuptialia)  
で出版されたものであったのである。商業的意図を持たないために発行部数も少なく、  
随分と探究したが、なかなか入手し難い理由がこれで分かった。この形式の印刷物はイ  
タリアでは必ずしも珍しくはないが、他のヨーロッパ諸国には見られないように思われ

---

<sup>1</sup> 『学習院女子大学紀要』、第10号、2008年(平成20年)、53-65頁。

<sup>2</sup> 同論文、54頁註2、64頁。

る<sup>3</sup>。この点で、非常に興味深い、地中海の連綿たる文化的伝統を示している。

1の五人の女性伝のうち三人のカテリーナを取り上げて見よう。先ずは小文で扱ったチボー一家の女性、Caterina Cybòから見ると、読む前の期待と違い、彼女の宗教改革者的性格への言及は見出されなかった。チボー家とメディチ家の恩恵を受けているセルドナーティとしては、カテリーナ・チボー（母はロレンツォ・イル・マニフィコ女子）をそのような女性とすることはできなかったのではなかろうか。このため、彼を「カトリック復興期のヒューマニスト」と題して拙文を公表したことは間違っていなかったといえよう。カテリーナの史的位置に関しては、セルドナーティの伝記を引用しながら、改革者との関連を述べる古典、*Bruto Amante, Giulia Gonzaga. Contessa di Fondi e il movimento religioso femminile nel secolo XVI con due incisioni e molti documenti inediti*, Bologna, 1896, p.310 がひとつの参考となる。さらに、カテリーナ・スフォルツァ小伝も特にメディチ家との関連で注目してよかろう。このカテリーナは黒帯隊のジョヴァンニ・デ・メディチの実母、最初のトスカーナ大公コジモの祖母になる。あの浩瀚なPier Desiderio Pasolini, *Caterina Sforza*, Roma, 1893-1897 (ristampa 1968), 4 voll. では、これが序の註で一文献として挙げられている。最後のカテリーナ・デ・メディチ（カトリクス・ド・メディス。ロレンツォ・イル・マニフィコ曾孫）については、これらのカテリーナや他のいずれの伝記よりも頁数が多かったとのみ記しておこう。

つぎに、2の俗語書簡集から、フランチェスコ・セルドナーティは、ヒューマニスト的书簡の作者というよりも、受信者にトルコと海上の情報をもたらす、現地（Raugia）在住の通信員という像が生まれてくる。これは一次史料を読むことから得られた発見であった。一言でヒューマニスト（古典志向者）と許されるが、彼もまた現実世界で生きていたのである。それらは1570年代と1600年初頭の各書簡（12通と7通）から成り立っている。70年代の最初の書簡は71年4月6日、最後は79年2月18日で、すべてRaugia（Ragusa, Dubrovnik）発である。因みにレパントの海戦は71年10月7日である。この最後の書簡では、トルコによるペルシャ制圧に触れている。17世紀最初の10年間の書簡はすべてRoma発である。最後は1608年5月9日の日付を持ち、ローマ発はいくらか実子に関する情報を含んでいる。

ローマでセルドナーティが亡くなったこともあり、そのジュリア通り（Via Giulia）の「フィレンツェ人の国民教会」、サン・ジョヴァンニ聖堂（San Giovanni dei Fiorentini）は彼に関わりがあるのでないかと推察したが、これ以上はなにも明らかに

<sup>3</sup> Olga Pinto, *Nuptialia. Saggio di bibliografia di scritti italiani pubblicati per nozze dal 1484 al 1799*, Firenze, 1971. 根占猷「イゾッタ・ノガローラの古書と私」、『星美学園短期大学 日伊総合研究所報』（*Bollettino Istituto di ricerca italo-giapponese*）、第3号、2007年、26-32、特に29-30頁。

ならなかった。ローマ教皇ユリウス2世に因むこの通りは、2008年に500年祭を祝っていた。セルドナーティの時代には一世紀目を迎えていたことになる。ラウジャRaugia（ラグーザRagusa、ドブロヴニクDubrovnik）については、セルドナーティと同時代人で注目に値するドメニコ会修道士、Serafino Razzi（1531 Marradi- 1611 Firenze）が<sup>4</sup>*La storia di Raugia*, Lucca, 1595を著わしている<sup>4</sup>。これは現在、復刻版がForniから出ている。今後、彼らの何らかの接点を求めて、或いは少なくとも彼らが共に生きた時代について、いくばくかでも事実を明らかにしたいと願っている。

\*Dedico questo piccolissimo saggio su Francesco Serdonati ai coniugi Borghesi, Claudio e Lidia, che ci hanno accolti calorosamente non solo a Firenze, ma anche a Marradi in estate del 2008.

(本学教授)

---

<sup>4</sup> セラフィノ・ラッツィに関しては、Patrik Macey, *Bonfire Songs. Savonarola's Musical Legacy*, Oxford, 1998, pp.135-144, 特にp.136. これはCD音楽付きでラッツィ作を含む。